



歴史資料のひきとり先を探す : 二つのケースから (＜フィールドリポート 2＞)

市沢, 哲

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:62-64

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499187>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499187>



Field 2 Reports

歴史資料のひきとり先を探す——二つのケースから——

市沢 哲

本誌のインタビューシリーズ「歴史研究の隣人たち」の第一回目にご登場いただいた屋宜明彦さんから、時々連絡をいただくことがある。「家じまい」の現場で古文書らしきモノ、オーナーは必要ないと言うが、歴史資料として保存すべきかもしれないモノが見つかったという連絡である。この間二度、やりとりをして資料のひきとり先を探すことがあった。二件とも、紹介すべき事例であると思ったので、その顛末を簡単にここに記すことにしたい。

*

一件目は、「家じまい」で謡曲の本が大量に見つかったケースである。そのお宅になぜ大量の謡曲本があるのか、現在暮らしている方々はご存じないという。歴史資料には違いがないが、謡曲の本は古本屋にも大量に出回っているし、古文書室のキャパを考えても大学で引き取るとはためらわれた。よい案を思いつかないので、近世日本文学を専攻している同僚

と日本の古典音楽を研究している同僚に、こういう資料を引き取ってくれるところがないか尋ねてみた。

国文学を専攻する同僚からは、同志社大学の古典教材開発研究センター（コテキリ）に相談したらどうかというアドバイスをいただいた。和本を活用した教材や、現物の和本に直接触れる古典教育のプログラムを開発し、中学校で実験的に教育実践するという、興味深い活動をされていることを、センターのHPから知った。同僚はセンターが和本を手を触れられる教材として収集している（「和本バンク」）ことも教えてくれた。また、謡曲本の行き場がないなら、自分が教材として使ってもいいとも言われた。

一方、古典音楽専攻の同僚からは、京都市立芸術大学の芸術資源研究センターを紹介された。同センターのHPによると、過去から継承され、現在も生み出されている芸術作品や資料を「芸術資源」ととらえ、これからの芸術創造のための

アーカイブとして育んでいくことを目的にしているという。

私はこのいずれの組織についても全く知らなかった。しかし、活動の目的はとても興味深く、歴史資料の保全と活用の方法という観点から見ても、参考になる活動をされていると思った。これまでも、歴史資料の保全という活動は、研究者だけで担えるものではなく、様々なアクターの協力があつてこそ実現すると考えてきたけれども、「隣人」どころか「同居人」に近い存在なのに、見えていないパートナーがまだたくさんいることを痛感した。

その後、古典音楽を専攻する同僚は芸術資源研究センターに寄贈の打診をしてくれた。センターからは、受け入れるのは難しいが、こういう本を手元に置いて研究したい大学院生がいるという返答があつた。また、大学院生にとつて、大量の謡曲本をそろえることは経済的にも負担であることも伝えられた。場所を取る和本を宙ぶらりんの状態にしておくわけにもいかないもので、いろいろ考えた末、当該の大学院生にひきとってもらうことにした。こうして謡曲本の落ち着き先が決まったのであつた。

繰り返しになるが、今回の一件から、歴史資料の行き先が決まらない場合、歴史資料と接点を持つありとあらゆる人に声がけすれば、思いもよらないひきとり手が見つかるかもしれないことを学んだ。歴史資料を残したいのなら、歴史資料

に対する様々なアプローチ、活用の仕方があることに思いをいたす必要がある。

*

二件目は、京都の商家の家じまいのケースである。屋宜さんから、古文書らしきモノが入っている文箱と、かなりの大きさの立派な木製看板の写真が送られてきた。例によつてオーナーの方は、必要ないので処分して構わないということであつたが、残す必要はないのかという問い合わせだった。

すぐに京都に行くこともできないし、私には近代のモノらしい古文書に関する知識もない。そこで思い切つて、京都市歴史資料館に連絡し、資料館に資料として収蔵すべき資料かどうかを確認してもらえないか依頼することにした。いきなり電話でお願いしたにもかかわらず、同館の松中博氏は、写真を見てさっそく現場に駆けつけ、資料を確認してくださつた。木製看板もなかなかみられない大きさであり、文書ともども歴史資料館に寄贈されることになった。蛇足ながら、木製看板の運送はそれなりに手（とお金）がかかる作業であつたが、屋宜さんのご好意でトラックを回してもらい、無事資料館に届けられた。

数日後、松中氏より受け入れた資料の概要を記した報告が送られてきた。京都の番組小学校の建設に関する貴重な史料であることがわかった。大工職関係の史料もあり、オーナー

さんの先祖が建築業者であったこともはじめてわかった。

貴重な歴史資料であったことがわかったのはもちろん嬉しかったが、松中さんが迅速に資料の内容についてレポートしてくださったことに感銘を受けた。おそらくオーナーさんは、松中さんの報告をみて、自分が寄贈した資料の意味を知るとともに、寄贈したことそのものの意味についても考えられたのではないかと思う。忘れた頃に報告が来るのと、たとえ概要であっても寄贈から間を置かず資料の内容について伝え聞くのとでは、寄贈者の印象はずいぶん違うのではないだろうか。

研究に時間がかけられるなら、かけるだけかけるのが理想だろう。しかしその時間感覚は、社会のそれとズレていることもままある。今回屋宜さんの会社は、二階建ての蔵二棟と町家一軒を二日で空にした。蔵の収蔵品を一点一点確認していたのでは、こんな短期間に蔵を空にすることはできない。しかし、今回のオーナーさんが願っているのはこういうスピード感の作業なのである。社会の感覚と折り合いながら、歴史資料の保全を行わなければ、歴史資料は「やつかいもの」になりかねない。ともかく輪郭だけでも寄贈されたモノの性格を迅速に伝えることの意味は、決して小さくない。ついでながら、松中さんからは京都を仕事場にすることも多い屋宜さんに、今後もこのようなケースがあれば是非連絡

がほしいという申し入れがあった。屋宜さんのような仕事に携わる人がより多くの地域の関係者となれば、歴史資料が保全される可能性が広がるだろう。

*

オーナーさんが歴史資料を手放したとき、それがどこに落ち着いていくのか、誰がそれに関わるのか。事例を紹介し合うことで、選択肢が増えていく。また、落ち着きだけでなく、活用の可能性も広がっていくのではないだろうか。そのことを祈念して、小文を閉じたい。